

# 沼津市若山牧水記念館

第66号 令和3年3月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



海みるとのほる香貫のひく山の

小松が原ゆ富士のよく見ゆ 牧水

歌集『くろ土』に収められた「香貫山」と題する次の三首のうちの第一首である。「八月中旬、東京を引払ひて駿河沼津在なる楊原村香貫山の麓に移住す、歌を詠み始めたるは九月半ばなりけむか。」の詞書があり、沼津へ移住して最初に詠んだ短歌である。

海見ると登る香貫の低山の小松が原ゆ富士のよく見ゆ  
香貫山いだきに来て吾子とあそび久しく居れば富士  
晴れにけり

ぬ 低山の香貫に登り真上なるそびゆる富士を見つつ時経

牧水は大正九年八月十五日に一家で沼津町の東隣の楊原村へ移住してきた。その住居は、香貫山の麓にあった。秋になり、長男の旅人にせがまれて香貫山に登った。息子にせがまれてということでもあるが、子どもの頃に、母・マキに連れられて山へ登り、「あれが海だ、と指さされると、

が、子どもの頃の思い出から、香貫山へ登れば憧れの海が見えるだろうという思いがあつて登つたに違いない。

随筆「香貫山」によれば、香貫山へ登る途中、眼に入ってきたのが、香貫山のふもとに沿って大きな弧を描きながら海に入っていく狩野川の眺めと狩野川に沿って建ち並んでいる沼津の町の美しさであり、開墾した畑であった。その向こうに憧れの広い海が見渡された。頂上に登り、海を眺め、目を北に移すと富士山が見えた。香貫山の頂上から見る富士山は、まるで頭上から何か物でも言いかけてるように思えた。その感動を牧水は冒頭の三首で表している。なお、三首のうちの第二首目が、昭和三十五年に香貫山の中腹に建立された歌碑に刻まれている。

ところで、沼津の町は、大正二年に町役場、警察署、郵便局などの官公署をはじめ、銀行、病院、神社仏閣など町の主要な施設の多くを焼失した大火に見舞われたため、町を新しく作り直している。牧水には、意外にハイカラで美しい町に見えたようである。

香貫山は、標高一九三メートルの低い山で、沼津の中心市街地からすぐ近くにあり、市民に親しまれている。通称「沼津アルプス」の起点としての北端の山として知られる。

実に異常のものを見る様に、胸がときめいたと『おもひでの記』に書いている

# 牧水と啄木

黒岩剛仁

若山牧水と石川啄木との交遊と呼べる期間は、明治四四年二月に牧水が啄木を訪ねた折から、翌年四月に牧水が啄木の臨終に立ち会うまでのわずかで一年二か月に過ぎない（明治四三年秋に浅草で一度すれ違った際に、紹介され立ち話を交わしているようだ）。しかしながら、啄木は明治一八年八月生まれで、啄木は明治一九年二月生まれと同学年である。同じ地方出身者（出身地は南と北で異なるもの）ということもあり、その付き合いは濃密なものだっただろう。それは、啄木の臨終に立ち会ったのが、啄木の父、妻（娘の京子はまだ五歳）と啄水だけだったことでも分かる（直前までいた金田一京助は、啄木の容体が一時安定したため国学院に出勤）。

そんな間柄だった啄水は、啄木の歌をどう捉えていたのだろうか。いくつかの文章が残されているが、大正二年に書かれた「石川啄木君の歌」（増進会出版社刊『若山牧水全集』第三巻所収）に最も端的に表されていると思う。

（前略）何となく私には彼の歌が二つの部類に分たれて眺めらるる。一は他念なく

ひたすらに自分をめぐみ愛くしむ歌である。一は、同じく其処から出て、持つて行きどころのない絶望をのべた歌である。それらが一緒に混った歌も無論多い。そして私の最も強みを感じるのには、後者に属するものである。まるで、天の一角をかすめて何処ともなく飛び去る星のやうな、または落ち着くさきを知らぬ一個の人間のたましひの瞳のやうな、見てゐて自分の心まで吸ひ取られてゆくやうな歌が多い。

これが、啄木の歌に対する啄水の総論である。大学の卒業論文で啄木をテーマにした私から見ても、なるほどと思わせられる。続けて各論に入り、啄水は啄木の歌を引きつつ感想を述べてゆく。

高山のいただきに登り  
なにかがなしに帽子をふりて  
下り来しかな （黒岩注・『二握の砂』）

何といふ人可憐つこい寂寥ぞ。私はとある見も知らぬ高山の絶頂からつと燃え立つて直ぐ消え去つた冷たい頬を風に吹か

せて降りて来る若かりし彼をまぎくと想ひ浮べる。

高きより飛びおりるとき心もて  
この一生を  
終るすべなきか （黒岩注・『二握の砂』）

一見甚だ平凡な歌である。私の所謂「さうですか歌」とも形を同じうしてゐる。而かもその裏に濡るるばかりにびつたりと密着してゐる人間の匂ひ、輝いてゐる人間の瞳を如何しやう。肺を病む人が身うちの血を咯き尽すやうな烈しい熱気や絶望や呪詛の心が、出るともなく溢れてゐるのを誰も感じないであらうか。

『二握の砂』刊行時点ではまだ啄木は発病していなかったはずだが、それは別として啄水の読みにならずに私がいる。

さらに啄水は、次のように付け加えることを忘れない。

（前略）このごろは一般によくこの調子を真似るやうである。一寸素人ずきのする、やり易い型だからであらうが、やりそこなふと実に薄つぺらなものになる。

では、そんな啄水と啄木の同じテーマを詠んだ歌を比べつつ読んでいくと、二人の異なる個性が見えてくるだろうか。



若山牧水



石川啄木 (石川啄木記念館 提供)

● くちづけ

ああ接吻<sup>くちづけ</sup>海<sup>うみ</sup>そのままに日は行かず鳥翔<sup>ま</sup>ひながら死<sup>う</sup>せ果てよいま

(若山牧水『海の声』)

きしきしと寒さに踏めば板軋<sup>こ</sup>む

かへりの廊下の

不意のくちづけ

(石川啄木『一握の砂』)



『海の声』



『一握の砂』 (石川啄木記念館 提供)

瞳という目の大きな娘の頬にキスせし  
時の耳の火照りよ

黒岩剛仁 歌集未収録歌

まずは(くちづけ)の歌。三枝昂之は『啄木 ふるさとの空遠みかも』の中で、右に引いた牧水と啄木の歌について次のように記している。

牧水の接吻は世界がストップするほどの衝撃であるのに対して、啄木のそれは、いわば手慣れた戯れのくちづけである。牧水が接吻現場の熱気を詠っているのに対して、啄木は回想歌。だから熱が消えているともいえるが、行為そのものが純情に程遠く、戯れの気配は消えない。

三枝は、純情そうな牧水に対し、啄木の行為に(気まぐれ)を読み取っている。

牧水のこの歌に関しては、俵万智『牧水の恋』の見解も引いておこう。

(前略)「鳥翔ひながら」の鳥は、現実のものというよりは、恋の成就を象徴する存在ではないだろうか。すべての時が止まったなかで、恋の歓喜に満ちた鳥が舞う。「死せ果てよいま」は、その鳥に向かっての言葉であると同時に、恋の頂点で自分たちも死んでしまいたいというくらい強い気持ちを感じさせる。

確かに、啄木の「不意のくちづけ」には牧水のような純情や強い気持ちは感じられないが、一方で恋の場面を詠みつつの上句の冷静な描写は、いかにも啄木らしいと思わせてくれる。

全くの余談になってしまうが、私は歌を作り始めた高校生の頃、右に引いた一首を詠ん

だことがある。今振り返ると、その純情さの度合いは牧水と啄木の間くらいだろうか。



『白梅集』

『死か芸術か』

『路上』

● 旅

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く  
 (若山牧水『海の声』)

幾山河越えさり行かは寂しさの終てなむ  
 国ぞ今日も旅ゆく (若山牧水『海の声』)

みだれ降る大ぞらの星そのもとの山また  
 山の闇を汽車行く (若山牧水『海の声』)

いたく汽車に疲れて猶も  
 きれぎれに思ふは  
 我のいとしさなりき  
 (石川啄木『二握の砂』)

遠くより  
 笛ながながとひびかせて  
 汽車今とある森林に入る  
 (石川啄木『二握の砂』)

さいはての駅に下り立ち  
 雪あかり  
 さびしき町にあゆみ入りにき  
 (石川啄木『二握の砂』)

両者の歌の背景は全く異なる。牧水の前二首は、大学在学中で夏休みの帰省の途次、中国地方を旅しているのに対し、啄木は、北海道漂泊時代の最終地点である釧路へ向かう車中、及び到着した折の冬の歌である。その季

節や背景の違いは措くとして、これらには両者の個性の対照性が際立つ。「寂しさの終てなむ国」を指すポジティブさと「さびしき町」に踏み込んでしまったと感じるネガティブさ。「こころの鉦をうち鳴し」つつ外へ向かう牧水と、「汽車に疲れて」内向してゆく啄木。さらには、牧水の三首目と読み比べても、乗っている汽車でさえ、星空の下の開けた闇を行く牧水と、閉じられた空間である森林に入っていく啄木というように。

● 生き物

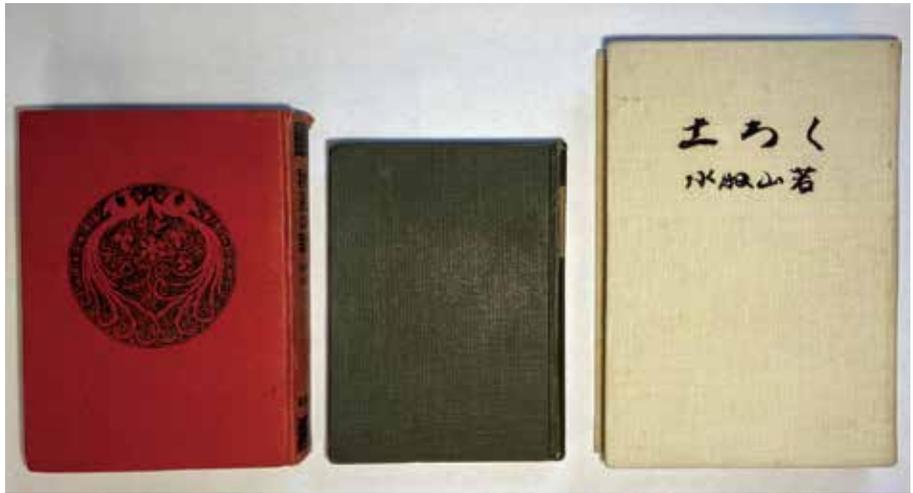
白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも  
 染まずただよふ (若山牧水『海の声』)

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き  
 魚の恋しかりけり (若山牧水『路上』)

東海の小島の磯の白砂に  
 われ泣きぬれて  
 蟹とたはむる (石川啄木『二握の砂』)

愁ひある少年の眼に羨みき  
 小鳥の飛ぶを  
 飛びてうたふを (石川啄木『二握の砂』)

この二首ずつを比較してみるとどうか。啄木は、やはり自らにこだわっている印象が強い。函館の海を「東海」とちよつと大きく表現しているものの、「われ泣きぬれて／蟹とた



『秋風の歌』

『みなかみ』

『くろ土』

はむる」ということで、蟹は主人公ではなく、自分の境遇や思いを表すための小道具に過ぎない。次の歌の「小鳥」もそうだ。上句の自らの思いに重点が置かれている。

それに対して牧水の二首では、「白鳥は哀しからずや」あるいは「眼の無き魚の恋しかりけり」と、生き物の方に思いを至しているように思われる。

● 酒

酒の毒しびれわたりしはらわたにあなこ  
こちよや沁む秋の風（若山牧水『海の声』）

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづ  
かに飲むべかりけり（若山牧水『路上』）

かんがへて飲みはじめたる一台の二合の  
酒の夏のゆふぐれ  
（若山牧水『死か芸術か』）

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく  
今日われ切に金を欲りせり  
（石川啄木『二握の砂』）

茫然として

ああ酒のかなしみぞ我に來れる  
立ちて舞ひなむ（石川啄木『二握の砂』）

あはれかの国のはてにて

酒のみき  
かなしみの滓を啜ることくに  
（石川啄木『二握の砂』）

牧水という酒、ということになるが、酒

好きの私にとっては、やはり牧水の三首には共感を覚える。ただ、共感している私は還暦過ぎ、これら三首を詠んでいる牧水はまだ二十代であるわけだから…。

啄木も酒は結構飲んだようだが、ちよつと酒に飲まれてる感じがして、本当に強かったかどうかは分からない。歌からは、酒を旨いと思つて飲んでいる様子は見られない。

● 銭・金

長火鉢にひとりつくねんと凭りこけて永  
き夜あかずおもふ銭のこと  
（若山牧水『白梅集』）

抽匣の数の多さよ家のうちかき探せども  
一銭もなし（若山牧水『くろ土』）

わが抱く思想はすべて  
金なきに因することし  
秋の風吹く  
（石川啄木『二握の砂』）

何事も金金とわらひ  
すこし経て

またも俄かに不平つりのり來  
（石川啄木『二握の砂』）

この二首ずつでは、若干「後出しじゃんけん」的な嫌いがあり、啄木の二十代に対して牧水はいずれも三十代の歌である。そうではあるのだが、敢えて言えば、牧水にどこかよ

その事感があるのに比べると、啄木の方は、金のなさが社会主義的な思想に向かわせたり、不平不満の原因になってしまったりするのである。

● 母

ここより母を讀ふときのありそのとき  
のわれのいかにかなしき  
(若山牧水『みなかみ』)

たはむれに母を背負ひて

そのあまり軽き<sup>かろ</sup>に泣きて

三歩あゆまず (石川啄木『二握の砂』)

啄木の有名な母の歌だが、彼は実際に母を負ぶって見たのだろうか。私には、どうしてもポーズのように感じられてしまうのだが。牧水は、その名を「マキ」という母親の名前から付けたと語っているほどに母を愛していたようだが、引用歌にも切実さを見る。

● 父

春は来ぬ老いにし父の御ひとみに白うう  
つらむ山ざくら花 (若山牧水『海の声』)

ふるさとの父の咳する度に斯く

咳の出づるや

病めばはかなし (石川啄木『二握の砂』)

父の歌では、むしろ牧水、啄木に同質性を

感じた。まあ、遠く住む父を思う息子の思いには、違いが生まれにくいということか。

● 妻

妻はしたにわれは二階にむきむきにちさ  
き窓あけくもり日に居る  
(若山牧水『秋風の歌』)

めづらしく妻をいとしく子をいとしくお  
もはるる日の昼顔の花  
(若山牧水『白梅集』)

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ  
花を買ひ来て  
妻としたしむ (石川啄木『二握の砂』)

わが妻のむかしの願ひ  
音楽のことにかかりき  
今はうたはず (石川啄木『二握の砂』)

いずれもいい歌だな、と思う(私に妻がないからかも知れないが)。特に、啄木の二首目。純粹に妻を思いやる気持ちが溢れている。しかしながら、若き日に音楽への願いを抱いていた妻が今は歌わなくなった。それも自分の所為か、とまたブーメランのように自らに思いを至しているのではあるが。

以上、いくつかのテーマで牧水と啄木の歌を比較して見てきたが、この文章には何か結

論があるわけではない。短期間にそれなりに濃密な付き合いをした二人の歌を、引き続き様々な切り口で味わっていきたいと思う次第である。

「筆者プロフィール」 くろいわ たけよし

昭和三十四年大阪府生れ。早稲田大学第一文学部卒。昭和五十五年「心の花」に入会、現在同誌編集チーフ、選者。昭和五十八年に株式会社電通に入社。

平成十四年第一歌集『天機』を発表、平成十八年に第二歌集『トリアージ』を発表。令和元年に十三年ぶりに発表した第三歌集『野球小僧』で第二十四回若山牧水賞を受賞。令和二年十月四日に開催した第六十七回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。



第三十一回

中学生短歌コンクール

第三十一回となる中学生短歌大会は、例年どおり市内中学校の参加により、千五百三十首の作品が集まった。本年は新型コロナウイルス感染症の流行により、中学生の生活にも大きな変化があったことが作品からも読み取れた。そんな社会不安の中でも、中学生らしい青春を生きる様子を伝えてくれる作品が多く見られた。

新型コロナウイルス感染症の拡大に鑑み、沼津牧水祭・碑前祭の開催を中止したため、表彰式ができなかったが、入選五十首が選ばれ、うち十首が特選作品に選ばれた。以下、特選作品を紹介する。

曾祖父の腕に抱かれた妹は今までに無い笑顔だった 馬場心優(第三中)  
曾祖父ということ、三世代離れた家族の様子が想像できる。腕に抱かれた妹を囲んで、四世代の家族みんなが、「今までに無い」笑顔に包まれている様子が目に浮かぶ。

夏空にそまる街からなりひびく豆ふ屋さんのラッパの音色  
吉村 碧(第五中)

早朝に豆腐屋さんのラッパの音を聞いた作者は、夏の一日の始まりを感じている。街の目覚めを促すラッパの音が印象的な作品。

新しい鞆を背負って歩み寄る「はじめまして」が君との始まり  
大竹彩里(第三中)

入学の日であろう。新しい鞆に、希望と不安を詰め込んだので新生活への出発の日、「君」と出会った。現在の「君」との関係をも思わせる広がりのある作品。

花を手にはほえむ母の横顔に改めて言う大好きだよ 樋川紗弥(第五中)

花は、作者がプレゼントしたものだろうか。母の笑顔に、喜びを感じると共に、母への思いを改めて感じている作者である。

じっちゃんよさらつとあつちへ行つたけど今まで本当にありがとう  
佐野颯太(金岡中)

祖父の死に人の死のあつけなさを感じると共に、祖父への感謝を思う作者である。大人へ近づきにつれて、人の死に直面することも多くなっていくことに、読者も気付かされる。

リモートで画面にうつった父の顔犬が反応大喜びだ 小杉紗香(暁秀中)

新型コロナウイルスが流行した今年は、家族が会うこともまままならず寂しい思いをしたことだ

ろう。リモートの画面での父親との対面に、飼い犬まで喜んでいてという。作者や家族の笑顔が伝わってくる。

友達が平方根とにらめっこ私とセミがエールを送る 海瀬春菜(第五中)

「平方根」という中学生ならではの言葉が詠い込んで、夏の一日の場面が鮮やかに目に浮かぶ作品である。

花屋さん初めて出会ったかすみそう小さく笑う白い雪のように 寺尾 天(市立高中等部)

初めて目にしたカスミソウに対する感動を詠っている。下の句の比喻が個性的で美しく、作者の感性の瑞々しさを伝えている。

夜の空星座を探す弟はTシャツ一枚寒くはないのか 芹澤美咲(第四中)

星座を探すことに一生懸命な弟の身体を気遣う作者である。星空に包まれる兄弟二人の姿と、静かな会話が想像させられる。

旋律と心臓の鼓動共に鳴る譜面の中のえんぴつの跡 高橋俐子(金岡中)

吹奏楽の発表をするステージでの場面だろうか。作者の緊張と共に、その演奏に向けて練習してきた時間を感じさせられる作品。

選歌は、沼津牧水会理事の青木朝子、河本尚子、永久保英敏が行った。(永久保英敏)

## 第二十五回若山牧水賞に 谷岡亜紀氏の歌集『ひびいどしやぶり』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十五回若山牧水賞は谷岡亜紀氏の第五歌集『ひびいどしやぶり』に決まった。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

谷岡氏は昭和三十四年高知市生れ。早稲田大学第一文学部西洋哲学科中退。二十歳の時短歌結社「心の花」に入会し、現在選者。神奈川新聞の「神奈川歌壇」の選者である。平成六年に第一歌集『臨界』で現代歌人協会賞、平成十九年に第三歌集『闇市』で前川佐美雄賞と寺山修司短歌賞、同年『言葉の位相』で日本歌人クラブ評論賞と佐藤佐太郎短歌賞を受賞。そのほかの歌集に『アジア・パザール』『風のファド』。評論集やエッセイもある。

アルチュール・ランボオの作品を読んで放浪の旅に憧れ、二十代にインドへ行き、目の

前にある圧倒的な「現実」に「短歌を残さねば」と湧きあがってくるものがあり、帰国後、インドで作った約三百首の短歌を佐佐木幸綱氏に見せたと高く評価され、短歌を本格的にやっていくことを決意したそうである。

受賞歌集は、アジア旅行を題材にした作品など現場に身を置いて詠むことへのこだわりが凝縮されていると評価されている。

谷岡氏は、受賞について「高知県出身の私は気候や風土が似ている宮崎県をずっとライバルと思っていた。その宮崎の賞を受賞できるのはありがたく、選考委員や皆さまには心よりお礼申し上げたい」と述べている。

選考委員の各氏は以下のように評している。佐佐木幸綱氏は「最近メディアの情報からの歌が多いが、実際に体験した旅にこだわった歌が多いのが彼の特徴だ。今回も充実期にある歌人が選ばれた。高野公彦氏は「歌から発せられる心の土台がしっかりしており、実力に裏打ちされた歌集といえる」。栗木京子氏は「ダイナミックだが大ざっぱではない。調べが繊細で美しく、細部まで言葉を選ぶなど吟味しながら詠んでいる」。伊藤一彦氏は「自分分は苦しみはまだ足りない、生きていることへの感謝をもっとしなければ」とストレ

ートに自分の生き方を振り返っている。行動的で思索的、しかも視野が広い歌人だ」。

なお、授賞式は、令和三年二月二日(火)に宮崎市の宮崎観光ホテルで行われる予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大に鑑みて延期された。

歌集『ひびいどしやぶり』から自選十首を紹介する。

風渡る大地の隅に初めての目覚めのごとく今朝目覚めたり  
苦しみと感謝が多分まだ足りない 酔い  
覚め今朝も「ひびいどしやぶり」  
噴水が凍っていたな あなたにもおれにも等しく時は過ぎゆく

雨の中雨のバス待つたまゆらを心は過去の街角におり  
記憶は老いず時のみがゆく 簡潔な冬の木立ちに陽が当たりおり

宇宙より還りし猿は一夜にいたく老いたり灰色の瞳  
陰鬱に黒き雨降る近未来より帰り来て歯を磨きおり

午後の車窓に熱帯雨林が続きおりマラッカ海峡まであとわずか  
手術後の疼痛の中まどろみて繰り返しみる墜落の夢

リラの花ほころび河に光充ち君無き国にまた春は来る